

序 現代日本の住様式をめぐって

—現代住様式論の構築にむけて

生活パラダイムの転換—現代化をどう解釈するのか

現代住居における生活パラダイム*をどう解釈するのかは、住様式の研究をすすめるにあたっておおきな問題である。

現在を転換期とみるのか。生活相の安定期とみるのか。60年代よりあとの時期のドラスチックな生活文化および生活技術の変容期からみれば、現在はいくぶん落ちついており比較的安定しているものとみることもできる。

生活パラダイムが転換期にあるととらえるみかたは、いちおうの生活の統合化されたひとつの安定化した形態が、従来の生活の枠組みと比較が可能なものとして、現在にあらわれているとの認識にたつみかたである。新旧のパラダイムがあって、その比較から転換というみかたがでてくる。

現在は、生活の要素の豊富化と新旧の要素のせめぎあいがある、あらたな落ちつきさき（スタイル）をもとめてせめぎあっている段階にあるのではないかと、筆者はとらえている。この状態を転換期とよんでいいのか。現代住居をめぐる状況は、あらたな生活パラダイムの形成にいたっているのだろうか。

ここで、現代住居にあらわれる生活パラダイムをかんがえるうえで、現在に進行している状況をどう解釈するかが問題になる。この解釈のしかたによって、このあとの議論はまったくことになった展開をするからである。

そこで、以下に、「現代化をどう解釈するのか」というみだしに集約される筆者のみかたを明確にしておきたい。

現代住居では、伝統的な生活のしかたのしくみのうえに、あらたな要素がもちこまれており、それらが並存している。このような状況の大部分は、産業化の進展によってもたらされたものである。伝統的な要素とあらたな要素とが並存するなかであらたな生活のしかた（様式）をもとめてせめぎあっているのである。

現代化とは、この新旧の要素が並立しかかわりあいながら、つくりあげられていく状況のことをいっているのである。けっして伝統的な要素が現代的な要素に置きかえられ転換している状態のみをさしているのではない。

この理解は、生活の表層にあらわれる現象にのみ目をおいては解釈をあやまる。これまでに形成され継承されてきた生活のしかたの枠組みは、そう弱いも

のではないのである。表層にあらわれる物質的な現象だけをみていると、いかにもあらたな要素におきかえられ転換している部分がおおいようにみえる。しかしながらここでいう生活の要素の並立は、そのような物質的な要素のみをさしているのではない。非物質的な要素、たとえば人々の行動のしかたには、かわらないものもおおいのである。またいったんはかわっても元に回帰するような現象さえもみられる（たとえば床面に依居する身体動作のしかたが連続してつづけられる現象、または、いったんは非床の身体動作のしかたにかわっても、それが床面に依拠する姿勢に回帰するような現象）。新旧の要素が並立してせめぎあっているというのは、こういう状況をさしているといっているのである。

＊筆者のつかう「パラダイム」の意味をのべておく。

辞書によれば「パラダイム (paradigm)」は、①模範・範例、②（ある事態に対する）模範的対応策、③（理論的）わく組み、などとある。ここでは第3の意味でつかっている。「生活パラダイム」を「生活を包括するわく組み（あるいはしくみ）」程度の意味としてつかうのである。けっして生活の規範（あるいは模範）などという意味をもたせて使っているわけではない。この点を明確にしておきたい。

日本の住居の文脈

このようにみると、これまでに住居の近代化や合理化の意味あいではつかわれてきた「欧米化」あるいは「洋風化」という概念は、誤解される側面をもっているようである（現在でもこれらの用語は、厳密な定義のないままにつかわれることがおおい）。

たしかに住生活のおおくの側面には、現代化の過程でもちこまれたおおくのあらたな要素が存在している。しかしこれを「洋風化」とよんでいいのか。現代化の過程でもちこまれた要素は豊富化したけれども、現代住居の住生活の枠ぐみは、それらの要素に席捲されてはいないのではないか、というのが筆者の意見である。

日本の住居は幕内弁当のようなものである。ごぞんじのように幕内弁当には、魚の焼きものや卵焼きのような和風のおかずと豚カツなどの洋風のおかずが同居している。豚カツは洋風か、というような詮索はここではひとまずおくとして、和洋のいろいろなおかずがとなりあって入っているのが幕内弁当なのだ。

この幕内弁当と住居とはよくにている。この両者が居場所をもとめせめぎあっているのが現代日本の住居の特徴のひとつなのである。

この要素のむすびつきかたは、日本語のアナロジーでいえばよくわかる。日

本語の文脈のなかには、たしかにおおくの外来語がはいりこんでいる。日本語は外来のあたらしい語をとりこみ豊富化をつづけている。しかし日本語が日本語であることに変わりはないのである。とりいれられた言葉は、日本語の文脈のなかでいかされ、日本語の要素になってしまっているのである（いま、日本語が注目されている。日本語は外来のあたらしい語をとりこみ豊富化をつづけて、いきいきとしているというのである。日本の住居もあらたな要素をとりこむことによって現代の生活に対応している。それがいきいきとした住まいかたに結びついているかは、議論のわかれるところであるが。）。

日本の住居もこれに似たところがある。現代日本の住居は、外来の要素や現代の生活技術のもとでのあらたな住生活の要素をとりこむことによって、いちじるしく豊富化したものなのである。しかしながら要素は豊富化したけれども、それらが日本人の住まいかたを席捲したわけではない。それまでにたもたれてきた伝統的な要素とあらたにとりこまれる要素とは、住居のなかで並立しているのである。いやそれらの要素は、たがいにもすびあって日本人の住まいかたの文脈のなかにくみこまれているのだ。

このように日本の住居は、軟体動物のように、これまでさまざまな異文化の要素を飲みこんできた。しかし飲みこんだものを咀嚼するということはたいへんなことなのだ。日本の住居のもつ特質は、軟体動物のように、あらたな要素をうけいれ、それをながい時間をかけて咀嚼するところにある。そして旧来のものにくみこんでしまう。あたかももともとからあったごとくみえるように。

このようにのべてきたのは、現代住居の研究には、現代化のもとでの要素のかかわりあいかたをとらえる住生活のしくみの追究が不足しているのではないか、とかがえるからである。

シンクロニクなみかたの必要

現代の生活パラダイムの理解には共時的なみかたが有効である。

よくしられているように、現代文明化は共通化と個別化とをもってすすんでいる。産業化のもとでの生活要素の豊富化は共通化をすすめているとみてよい。グローバルにみて生活の要素の共通化が進行しているのである。しかしそこには、また民族に固有の生活様式が強調されるあらたな生活様式（文化）がうまれるとのかんがえかたもある。

わが国の現代住居は、都市部の住居・農村部の住居にかかわらずに、そのような現代文明化のもとでのあらたな住の様式を模索している状況が、現象としてあらわれているものなのである。

このような現代の住居ですすんでいる状況の理解には、シンクロニックに要素とその結合のしかたのしくみをさぐる追究が有効である。住生活の諸要素の結合の関係をみる必要があるからである。誤解のないようにいっておくが、筆者はダイアクロニックなみかたを否定しているわけではない。シンクロニックに共時的な比較から現代住居における居住のしくみがみえてくるのではないかといっているのである。

生活の近代化合理化の主張のもとでの住居研究は、住居の発展あるいはしくみの理解がじゅうぶんでないものとして批判された。これは生活手段・生活技術の変革がすすみつつあった時期に提起されたものであり、住居における生活のしくみの追求の再構築に重要な視点をもたらしたものと筆者はかんがえている。

これらの批判は農村住居の研究からはじまったものである（近年に、一部の都市住居の研究者のなかから、住居の発展の経緯であらわれる住文化の側面を評価するものがでてきているが）。60年代にはじまり70年代から80年代にすすむドラスチックな生活変容のもとで、都市部農村部にかかわらず、居住の枠組みはおおきくかわるのだが、近代主義的・合理主義的なプリンシプルのもとですすんだ計画論を批判的にとらえるみかたの展開は、この時期にすすむ変容の解釈と継承されてきた住みかたのしくみをとらえるのに、有用なものであった。また日常的な家庭生活にとどまることなく、生活の非日常的な側面からの住居空間の解釈を住居の研究にとりこんだこともみおとせない。しかしながら、あえていえば、それが原初的な空間構成の意味の解釈に力点をおくあまりに、現代住居にあらわれる問題へのとりくみへのウエイトが少ないものとなり、現状肯定的なものにおちいついていったことは否めない。

（この時期に「現代風俗研究会」が、またすこしたって「路上観察学会」などがあらわれる。これらは都市部に目をむけたものであるが、結果として、おなじように都市生活の解釈に現状肯定的なみかたをもたらしている。）

この段階の研究のもたらした影響は、現在にいたるまでの過程で、いくつかの未解決な問題をのこしている。

現代の住居の理解のためには、現代の視点からさかのぼって歴史的な発展の経緯の解釈をすることは重要である。筆者にもこれに異論はない。しかしながら、さきに指摘するようにダイアクロニックなみかたは必要だが、同時に現代性の追求がおこなわれなければならないし、前者は後者のためにこそおこなわれる必要があるとかんがえる。現代にすすんでいる状況の意味の解釈にこそ方法はいかされるべきである。